

実態をわかりやすく紹介し、国民に考える機会と知識を提供すること、最近の在日米軍基地と自衛隊の新しい補完関係や地位協定の不

当性と土地の無償提供の判断、といったことについても関心を持つことが必要であろう。



長瀬隆著 『微笑の沈黙』 を読んで

久保文

長瀬隆氏の新著「微笑（ほほえみ）の沈黙」が6月末に出版されました。日本の敗戦と更にヒロシマとの関わりの深い作品です。

樺太大泊で敗戦を迎えた14歳の少年のその後の半世紀の歴史をつぶさに読みながら主人公北村高志の人生の重さを感じ考えずにはいられません。中学二年生で敗戦に遭遇し、ソ連占領下の学校で学ぶことになった彼はその最初の授業で物理の教師から広島と長崎に投下された新型爆弾と報じられていたものの真の名称も教えられ、原子の構造から始まり、原爆の原理を教師は1時間にわたって説いたのです。そして「このような大量破壊兵器の出現により、第三次世界大戦は不可能となった。君たちの任務は平和で文化的な日本を建設することにある」と云われたという。彼はその授業を多大な感銘をもって聴き、日本への引き揚げ後もその思い出を大事に保持して生きたのです。そして彼の結婚の相手が被爆者加耶道子となった遠因は実にこのときに形成されたということです。

彼にとってもう一つ忘れられない樺太は国民学校時代を過ごした遠澗（とうふち）です。幼子の時代には父親の肩車で何度か眺めた湖や山々の美しさ。戦後のソ連支配下で強制労働に従った最後の日々S村から遠澗に彼は許可を得て2泊3日滞在しました。「14歳の

彼はそれを生涯にわたって記憶しつづけるべく両眼に力をこめて見たのであり、そのためにはそれは後の彼にとっては常に容易に思い出せるだけでなく、常に眼前に揺曳しているものとなった。そしてそれは彼におけるものごとの判断の基準、理想となったのである。それは故郷の喪失の代償として彼が獲得したものであり、したがってそれは保持して生きねばならず、そしていつの日にか書かねばならないものであった。」と書かれています。この書が樺太生まれの少年の敗戦後に辿り続けた人生の記録であり決してフィクションの作品では無いことは確かであり敗戦50年、被爆50年に近距離被爆者を妻としたロシア文学者であり、作家であり、原水爆反対運動家でもあり、ある時期にはソ連、中国との貿易会社のサラリーマンでもあった日本男性の記録が出たと云うことは、記念すべきことでしょう。

この物語の中には結婚の申込みにしてもそれに到るまでの女性への近づきの言葉としても甘いひとしづくの言葉も出て来ない。ただ道子が美しく、容姿端麗、被爆体験を語る調子が巫子のような雰囲気をもっているというようにことがいささか書かれているにすぎない。寧ろ結婚後二児をもうけ長男を亡くし、その後の体の不調がドン底に達していた10年間に彼が妻道子に対して発した言葉の凄さ

にその人生の凄惨を感じるのです。しかし癌の続発のために両乳房を失い、腎臓の片方を無くして以来透析のための通院は続く。彼女は心身ともに全く通常の生活の出来ない期間を経なければならなかったが、それを越えて復活したのです。この作品の中では新薬発見のおかげと書かれていますが、飲んだくれ、悪態をつきながらも夫高志は底知れぬ情愛で道子の生活を取り戻させたのです。しかし何としても私は作者がこの書の最後に書いた1967年の立春を前に4歳11ヶ月で亡くなった長男ツヨシの父親への言葉に救われたような気がしたのです。

道子の状態が悪化してから、彼は酒を飲むのは一日仕事を終えた就寝前の時間になり、そのとき彼はツヨシと語り合いながら、ひとりで飲んだ。そしてそのとき彼は居間のガラス戸のむこうの庭の暗闇にその子の顔を思い浮かべていたのだ。彼はしばしば涙ぐみ、少なくとも20回は「ツヨシ、援けてくれよ」と叫んだ。その子は没後彼の前に現れるとき常に微笑んで立っていた。しかし常になにも語らず、沈黙していた。チアノーゼによる紫色の唇が動いても言葉が発せられることは無く、彼自身はその微笑の沈黙から何事かを聞き取り、それを助言とも依頼とも願いとも感じて、それに従って生きてきたと書かれたあとに、ツヨシちゃんのことばがでてくるのです。

そしてツヨシちゃん言葉は「あの年から27年が経過しました。ぼくは任務を終えました。さようなら、パパ。ママに、そしてほんとうに短い期間だったのだけれどぼくがともに暮らし、可愛がったり嫉いたりしていた弟のヒロシによろしくね。ぼくは今初めてぼくの4歳11ヶ月の死を真に死ぬでしょう」で終わっています。父北村高志にとってのツヨ

シの微笑の沈黙もこれで終わるのでしょうか。ツヨシちゃんが亡くなって葬儀が終わった時、父高志は声を震わせて泣き鳴咽したという。

「樺太のヒロシマの子」と呼んで飛び抜けて利発なツヨシを熱愛したパパの気持ちを思うと胸を突き上げられる心地がします。ツヨシちゃんがまだよちよち歩きの頃だったでしょうかパパはツヨシちゃんを肩車してその頃住んでいた石神井公園の三宝寺池のほとりを歩き樺太の遠溲を偲んだこともありました。半世紀以上も前の三宝寺池のあたりをよく知っている私にはそれよりはずっと後のことです。がまだ静かだった池の辺のパパの散歩姿が目に見えるようです。この新著は著者の御両親に捧げられています。嬉しいことです。

この長瀬隆氏の新著をここに私が長々紹介する必要はありません。同氏が「びーす・びあ」83、84号に書かれた「ヒロシマとは何か」（上、下）にこの作品の作者の意図を詳しく書いてくださっています。これをお読み頂いてもわかることですが、この「微笑の沈黙」の中には主人公北村高志が城北大露文科の学生であった頃最も私淑した師松山隆教授が各所に出てきます。その都度、シエストフ、ドストエフスキー、マルクスなどの哲学が解説されています。その松山隆教授に当時最も愛された学生は吉川清吾と書かれているところがあります。彼は露文の学生ではなかったのですが、日本の革命を志していられた教授にとって学生運動の先頭にいたこの学生に深く目をかけていられたということです。この吉川こそ平和事務所の創設者のひとり吉田嘉清氏なのです。松山隆教授は松尾隆教授（早大露文科）のことで、長瀬氏の次の作品はこの若くして亡くなった素晴らしい教授について書かれるということです。私などが若い時熱中して読んだシエストフの「ドストエ

フスキーとニーチェ（一悲劇の哲学一）」を
翻訳された方だったとはこの著書によって知
ることができました。戦後世代の思想家、哲
学者、作家、政治家たちが松尾先生が伝えて
くださったドストエフスキー、ニーチェ、マ
ルクスそして樺太に行ったことのあるチェホ
フなどの思想をどのように身につけたか実践

したか詳らかに分析してくださることによ
う。期待しています。しかし、その前に先ず
「微笑の沈黙」をどうぞ！

「微笑の沈黙」発行所 晩聲社

☎03-5261-8021

1995年6月16日初版

定価3090円（税込み）

<平和事務所懇談会より>



米原爆展中止と反核運動

講師： 池山 重朗 氏

本稿は、本年3月31日に開催された本平和事務所が主催した懇談会における池山 #
重朗（核問題研究者）氏の「米原爆展中止と反核運動」と題するお話を要約しまとめ #
たものです。（まとめと文責：山谷能博）

強力な米退役軍人の会

スミソニアン航空宇宙博物館が広島の前爆展を中止にした前後のいきさつを見ておき
まして、これを止めさせる上で一番大きな力を
発揮したのはアメリカの退役軍人の会で、約
320万人いるそうです。彼らはもし広島・
長崎に原爆を落とさなかったら、われわれの
犠牲ももっと増えただろうと自己正当化をし
ているらしい。そういう論理がはたして成り
立つのかどうか。そんなことを念頭におきな
がら、第二次世界大戦末期、イギリスとアメ
リカがドイツのドレスデンに対して行った爆
撃を見ますと、少なく見積もっても3万
5千人は死んだだろうと言われています。そ
こでは全く軍事的性格をもたない非戦闘員を
あらかじめ殺害する目的でやった形跡が大い
にあります。

当時ドレスデンは駐留軍隊もなければ兵器
工場もない文化的な遺跡の豊富な都市で、東
からの難民が多くやってきました。です
から戦闘意欲を喪失させるための無差別攻撃
だとの批判があるわけです。それを記念する
今年の集会でドイツ大統領は、われわれはド
レスデンの被害を忘れることはできないと言
い、だからと言ってナチズムが他国に対して
侵した罪を免罪することはできないとはっき
り言っています。そしてアメリカからは統合
参謀本部議長が出席し、おくやみを述べると
いうセレモニーがありました。そこで参謀本
部議長は「戦争末期に政治家のシベリアンコ
ントロールがきかなくなってきて軍部が暴走
して……」と述べています。

一方3月10日の東京大空襲記念集会に出
席したモンドール大使は簡単な挨拶をした
だけでした。この違いについてですが、時事通
信のニューヨーク総局長佐々木さんの反省に